

# 潜在する無数のメディア： 社会センター運動のひらく未来

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学都市研究プラザ 公開日: 2024-09-09 キーワード: オペライズモ, アウトノミア, 社会センター, 自主管理, ミラノ 作成者: 櫻田, 和也 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2021129">https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2021129</a>

# 潜在する無数のメディア —— 社会センター運動のひらく未来

櫻田和也

## ミラノにはレオンカヴァッロがある。

かつてル・モンド紙に「イタリア文化の宝石」と評されたミラノの Leoncavallo s.p.a. は、イタリア各地に今も100以上ある社会センター (Centro Sociale) のなかでも最大規模のひとつだ (Klein, 2001)。

2009年2月のある日、わたしたちは市民メディア調査のためそこを訪問した\*1。知らない者はいないというから駅前のタクシーをひろってその名を告げたところ、たしかに5分少々でその巨大な印刷工場跡地にたどり着いた。ミラノ中央駅から真直ぐ北東へと線路沿い、高架下あたりから手のこんだグラフィティが並ぶのに目を奪われていると、辻に面したひととき大きな壁画が姿を現す。外を歩くとすぐ南側には日系企業のオフィス。内からは大音量のヒップホップが響き、肌の色も年齢好も様々の、それでも圧倒的多数を占める「若者」が歩き集う夕暮れ。ここにプレシアを本拠とする自由ラジオ「衝撃波 Radio Onda d'Urto」のミラノ放送局もある。調査チームのなかにはインディメディアや市民テレビ局の実践家や研究者がいたのでその旨を告げ、暇をみて話をきかせてほしいと協力を依頼した上で入場料を支払うと、ひとりひとり手の甲にスタンプを押されてその広大なスペースにはいった。



図1 レオンカヴァッロ外壁 (撮影 2009年2月7日 山口洋典)

はいつてすぐ受付の奥には事務所があるのだろうか、関係者

入り口ようだ。左へ折れて入場後、廊下を抜けると右手にはカフェのバーカウンターがみえる。ふと左をふり返ると、そこがインフォショップだった。自主制作の資料や本、ビデオなどのならぶ書店だ。談笑する人々の様子をうかがうと、音楽の客層から感じられた印象とは異なり、髪の色も男女も多い。カフェに向かって内壁の向こうには巨大なフロア、ここが今晚のメイン会場のようだ。大規模なサウンドシステムが組まれており、おそらくは商業ベースのハコにもひけをとらないキャパシティ。既に500人はいるだろう。わたしたちはしばし圧倒された。

しかしまだこれは、レオンカヴァッロの半分でしかなかった。その奥には先のカフェとは独立したキッチンを有する食堂があり、通路を挟んで小劇場が、さらに建物の外に出たら中庭があるかと思うと、なんと庭の向こうの壁沿いにまで別棟が並んでいたのだ。その一つひとつが昔の大学にあったサークルボックス棟程度 (数軒並びの文化住宅くらい) の大きさはあり、ふだんからグループごとに運営されているのだろう、この夜もそれぞれに異なる音楽や文化傾向の集いがもたれていた\*2。敷地内に少なくとも1,000人。

あとで案内されたラジオ局のスタジオは戻って手前の2階、吹き抜けのメイン会場PA裏の通路を抜けた階段をあがった一室にあった。図面をみると、この2階には他にも練習場や資料室、ゲートルームなどがあるようだ。これが延床面積約4,000平米の概要である。

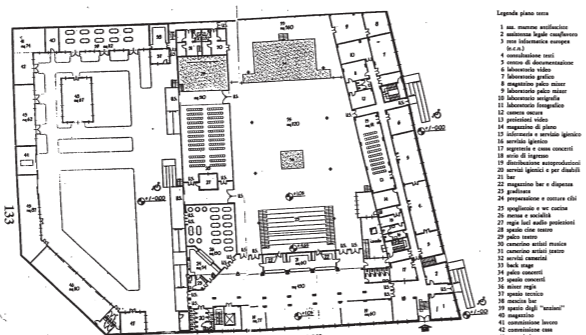


図2 レオンカヴァッロ平面図 (地上階) (Centro Sociale Leoncavallo, 1995) 図1は図2左下角の外壁にあたる

## 1. ポスト・アウトノミアの社会センター運動

こうした社会センターの由来は、直接的には1970年代のアウトノミア (運動 movimento) にその系譜をたどることができる。それはイタリア共産党がキリスト教民主党と連立政権を組むという「歴史的妥協」を背景に、1968年の世界的な運動の高揚以来すこしも退潮することなく、下層労働者運動による CUB (底辺統一同盟 Confederazione Unitaria di Base) の組織化を受けポテレー・オペライオが解散したのをはじめ、あらゆる議会外左翼諸党派が解消するような形で生じた (麻生, 1983; Wright, 2002)。

フェリックス・ガタリが「文化台風の目」と形容し、熱烈に支持したポロニーヤの自由ラジオ「アリーチェ」仕掛人ピフォ (フランコ・ベラルディ) は、後にフランスの知識人たちがアウトノミア運動を知ることとなり国際的反弹圧連帯を呼びかけるネットワークの媒介=メディアとなった人物であるが、歴史的妥協の政治的な深刻さはかれの言葉では「議会の絶対多数、ほとんど100%が一致して社会と対立していた」(ベラルディ, 2009:25) というほどだった。こうした政治のあり方に決して妥協することのなかった工場労働者、南部から北部へと移住した若き労働者、学生そして失業者たちの広汎かつ大衆的な社会的連帯が都市空間に表出されたのが運動としてのアウトノミアである。

当然のことながら68年に先行したアヴァンギャルド芸術からも大いに刺激を受けつつ\*3、しかし必ずしもアール・クレアティーヴァ=創造派のみに留まらない (運動) 全体としての表現の文化的な豊穡さ、社会的な実践の多様性は、現在に至るまで世界中の芸術・社会運動の現場へと影響を及ぼし続けている。たとえばその空間実践をシチュアシオニストをひきつぐものと位置づける伊藤公雄は「アウトノミアをはじめとする、1970年代のイタリアの (運動) は、資本と市場によるスペクタクルの支配に対して、これに対抗的な自前のスペクタクル空間の構築を常に模索し続けた。それは、空間の占拠にとどまらず、自由ラジオの運動などに見られるように、市場のメディアに抗する自前のメディアの構築という形でも展開されたのである」(伊藤, 1997) と述べる\*4。

社会センターに関する主要な研究はイタリアではまず90年代半ばに相次いで刊行され (AA.VV., 1994; Ibba, 1995; Consorzio AASTER, CS COX 18, CS Leoncavallo, Moroni, 1996)、今ではそれら先行研究に加えて2000年前後のあらたな運動の展開をふまえた論文が英語でも発表されるようになり、あらためて世界的な注目を集めている。ここでは社会センターの現代史を包括的にまとめ Antipode 誌に掲載されたムドゥによる論文 (Mudu, 2004) を参考に、その展開を整理しておきたい。

ムドゥもやはり社会センターの起源を70年代アウトノミア (運動) のなごりに位置づけている\*5が、その背景として生産様式のポス

ト・フォーディズムへの移行ともいうべき産業構造の転換があったことを見のがさない。この移行は決して単線的なものでなく、ネグリ+ハートのいうとおり、むしろ不完全な経済的諸形態の異種混交 (ネグリ、ハート, 2003: 372-373) というべき過程であり、また産業構造の転換は都市空間の編成にも直接的な影響を及ぼす。ミラノではイノチェンティやアルファ・ロメオ (自動車)、ピレリ (タイヤ)、マレリ (電装)、プレーダ (兵器) などの大企業が70年代後半に次々と生産を停止、各々保有の工場や倉庫が閉鎖された。80年代末までに数十万の労働者が職を失い、90年代後半までにミラノ市内だけで700万平米の土地が空いたといわれている。そして都市の顔が工業から金融、ファッション、サービス業へと変貌するのにともない、地代家賃は高騰する。

ムドゥはこうした時期、80年代後半になって社会センターが質量ともに飛躍的に拡大し成長した要因として、転回点というべき85年に起きた2つの出来事をあげている。まず、学校の民営化路線に対する抗議行動に十代の中高生が大挙して参加し全国各地の学校占拠が行われ (運動) がよみがえったこと (麻生, 1986) \*6。つぎに、賃金をまもるための国民投票\*7に左派が敗北したこと。この代表政治に対して、下層労働者の運動は工場評議会型の労組再生をめざして下からの組織化を行う COBAS (底辺委員会 Comitati di Base) を形成し社会センターと連携するというあらたな展開をみせる (ヴィルノ, 1997)。ムドゥによると、まさに85年以降こうして生じた第二波こそ現在に至る (社会センター運動) に他ならない。

社会センター運動は、弾圧に対しても「鉛の時代」(伊藤, 1993) を再現させることなく、93年頃には交渉の時代に入った。占拠スペースの合法化へと向けた制度化の過程である。多くの社会センターでは (運動) 内部、あるいは社会センター同士、そして自治体との緊張関係を長らく経て交渉にはいり、空間ないし建物の使用に公式な認可をとりつけるようになった。98年には存在する社会センターのおよそ半数が所有者 (大多数は自治体などの公共部門) との合意に至ったといわれている。容易に想像されるように、社会センターのように空ビルを改修し、旧来型の法人組織をもって社会的サービスを提供しつつ運用するためには莫大な資金と膨大な人員が必要とされるだろう。こうした点に自由主義的な観点からも一定の経済合理性が見出されたからこそ、90年代の制度化過程がひらかれたのだった。

ここで社会センターの量的分布を確認しておこう。図3は、2004年現在に入手しえた先行研究と資料から、1985年から2003年の18年間に (少なくとも2ヶ月間以上は) 活動していたことが確認された社会センターを数えあげて作成された地図である。

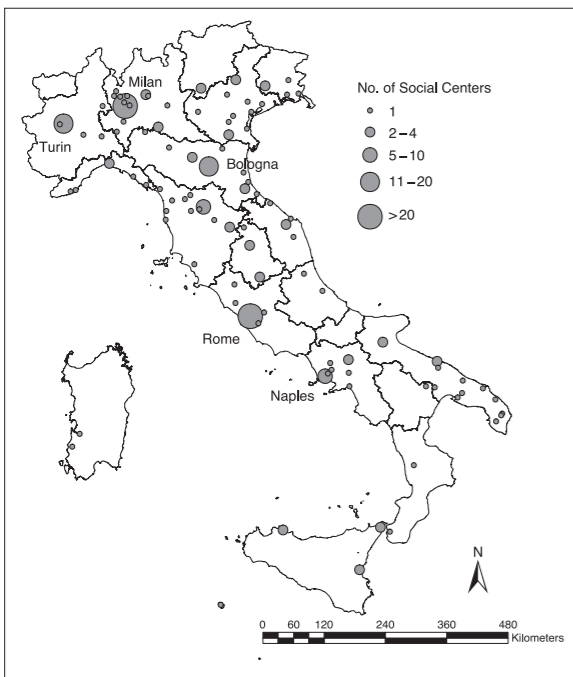


図3 イタリアにおける社会センターの分布 (1985-2003) (Mudu, 2004: 929)

ひとめ見て分かる通り、戦前からの工業化の北部偏重傾向と人口集中、〈運動〉諸力の分布を反映してのことだろうか、およそ半数は4つの大都市部（ローマ、ミラノ、トリノ、ボローニャ）に集中しており、北部116（44.3%）、中部99（37.8%）、南部47（17.9%）と地域的偏在性がみられるのも事実である。しかし、それでもなおヴァッレ・ダオスタとモリーゼの2州以外なら必ずあるというくらいには遍く存在する点には留意したい。数量上のピークを迎えたのは90年代初頭のことだったとみられるが、この統計のとられた直近2年間（2001-2003年）においても総計262のうち約130が活動していた\*8。

数量的ピークとあわせて制度化の過程がみられた90年代の初頭は、〈運動〉そのものの文脈も大きく転回した時代であった。まず94年には、チアパス蜂起をうけて社会センター運動が全面的にサバティスタ連帯行動をとる。おなじ頃インターネットの大衆的普及とGNU/Linuxのハッカーカルチャーが80年代以来のサイバーパンク文化とも結びつき、運動に大きな思想的かつ方法論的なインパクトを及ぼす。さらに99年にはシアトルでのWTO抗議行動から生まれたインディメディアも大西洋をわたり（櫻田, 2010）、イタリアでは社会センターが技術的・文化的に豊かな基盤となって、オフラインとオンラインとの結節点＝文字通りのメディア拠点となる。こうして社会センター運動は、交渉の過程を経てなおも（少なくとも相対的な）自律性を維持しつつ、現代文化の深化を果たしたのである。

## 2. レオンカヴァッロ小史

「レオンカヴァッロが、歴史に登場するのは、1975年10月のことだった。ミラノの運動グループがレオンカヴァッロ通りにある医療器具工場跡地の大きな空き家の占拠を行ったのだ。総面積3600㎡というかなりの規模をもつレオンカヴァッロは、この後、ミラノを中心にイタリアのカウンター・ムーブメントにとって、永続的な基地＝空間として存続していくことになる」（伊藤, 1997）。しかしこの工場跡地は、現在のレオンカヴァッロと立地が少し異なる。場所の推移を図4に示しながら、設立以来の経緯をふりかえろう。

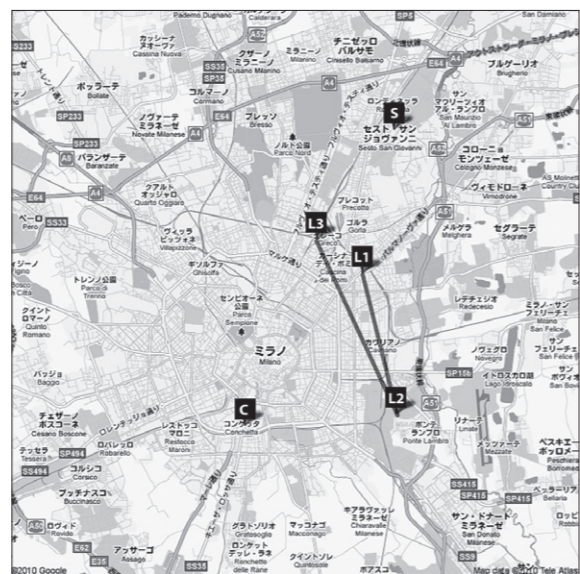


図4 レオンカヴァッロ移動図 (L1=1975-1994, L2=1994, L3=1994-) \*9

1975年10月18日、この日ミラノ北東のマンチネッリ通りに面した小さな建物を〈運動〉にかかわる多様な人々が占拠した。その建物はかつて3つの会社に用いられてきたのだが、その数年間は空いたまま放置されていた。かれらはそこに入ってすぐ、レオンカヴァッロ通りに向かって隣接する巨大な倉庫が眠っていたのを発見する。こうして、社会センター・レオンカヴァッロは誕生した\*10。それはかつてイタリアのスターリングラード＝重工業集積都市として期待されたセスト・サンジョヴァンニ [S] の南、ミラノ中央駅から北東にあたる労働者階級のカゾレット地区 [L1]、ここに根を下ろしたのである。

建物の大掃除と修繕がおわると、コンサートや美術工芸のワークショップ、劇団のための芝居小屋づくり、フェミニストによる女性相談所、民衆学校などの諸活動が展開された。民衆学校は地域に居住する字の読めない人々への識字教育や労働者の再教育の場を提供し、150時間の単位制で高卒資格を取得できるものと労働協約により保証された社会教育講座として公式に当局の承認をとりつけることとなった。伊藤によると、レオンカヴァッロは当初から

「資本からの脱領域化の運動でありながら、結局、資本や行政の欠落部分を埋める社会活動として、資本や行政に奉仕している」という皮肉が出るほどに、広範かつ強力なものであったという。この「もうひとつの社会」こそが地域で社会そのものを構成する。

当時のミラノ郊外では、ハードドラッグの蔓延が深刻な社会問題となっていた。これに対してレオンカヴァッロは近隣地域での密売自警運動を展開していたのだが、1978年3月18日、若き活動家2名が射殺される。当時18歳だったかれらは、ヘロインとコカインの密売を追及しすぎたようだ\*11。事件の夜、ひと晩で何万部ものリーフレットを印刷したセンターは〈運動〉の経路を通じてヨーロッパ全土に配布、その葬儀には10万人の人々が集った。そしてこの哀しみを忘れないかれらの母親と近隣地域の女性たちは「レオンカヴァッロの反ファシストおかあさんたち Mamme antifasciste del Leoncavallo」\*12を組織し、ますます主体的にセンターの運営に携わるようになる。

80年代初頭、弾圧と暴力の「鉛の時代」はレオンカヴァッロにも重くのしかかる。武装闘争との関係が問われ、やはりここでも「弾圧とのたたかい」が主題とされてしまうのだ。しかし85年の高校生たちの運動を契機とした第二波（社会センター運動）を通じた再生の過程にこそ、レオンカヴァッロの面目躍如たるものがあつた。運営内部に幾重もの矛盾を抱えながらもバンクやサブカルチャーの若者たちにセンターをひらき、世界各地から重要なアーティストを招いた当時のレオンカヴァッロは、インディペンデント音楽の拠点としても人々の記憶に残る。

70年代〈運動〉のなかでスクウォットや近隣委員会活動はイタリア全土で展開されたが、「鉛の時代」を経て80年代まで生き残った社会センターはほとんどなかった。だが〈運動〉のあとも自由ラジオのネットワークや書店、レコード店などが様々な文化的、政治的傾向の草の根の支持を基盤に活動を続ける。いつしかそこにバンクの若者も混じるようになり、バンクたちはみずからの身体を公共空間における抵抗の手段とする。これが第二波社会センター運動を育む土壌を形成し、社会センターは鉛の時代をこえて、ポスト・バンクのアンダーグラウンド音楽シーンを育ててきた。

ところが89年、レオンカヴァッロが警察の襲撃を受けるという事件がおこる。8月16日早朝のことだ。明白に強制排除を意図したこの襲撃により施設はブルドーザーで破壊され、人々は警察から催涙弾に加えて殴る蹴るの暴行を受けた。これには大方の予想を軽く上回る大規模な抗議行動が迅速にとられ、この弾圧の不当性はマス・メディアを通じても何週にもわたって報道される。80年代初頭にはもはや忘れ去られたかに思われた社会センターがおもむろに社会的な耳目を集めたそのとき、予期せず大衆的な連帯が示されたのである。人々は文字通りブロックを一つ一つ積みかさねペンキ

を塗り直し、壊された建物を修復した。こうしてレオンカヴァッロは、イタリア社会センター運動のシンボルとなる。

この日の出来事は、中小の工場地帯から居住地へと姿をかえようとする近隣地域のなかで、当該物件をオフィスや商店へと再開発する業者に元所有者が売却したことが引き金となったのだった。ジェントリフィケーションの先駆けである。そのときにとられた手段は社会センターを必要とする人々にとって排除というほかない試みであったが、だからこそ予期されざる大衆的な抗議行動を呼び寄せた。これをはねのけたレオンカヴァッロは、したがって圧倒的な存在となるが、しかし排除の危険性はいつもついてまわる。

ついにレオンカヴァッロ通りから退去を余儀なくされたのが94年のことだった。年明け早々の1月20日に当局が再び立ち退きを迫ると、このときまでに困難な議論を重ねてきたかれらは、非暴力の抵抗をもって物件を明渡し、今度は警察との衝突を回避したのである。そしてリナーテ空港にもほど近い、ミラノ東部郊外のサロモーネ通りに「おかあさんたち」が半年間の期間限定で確保した新たな拠点 [L2] へと引越大行進を行う。そして、この場所でもふだん以上の活動を展開したが、保証が切れた8月9日かれらはすぐに撤退する。

ひと月後の9月8日、突如として姿を現したのが誕生の地カゾレットからそう遠くないグレーコ地区ヴァター通りの4,000㎡、冒頭で紹介した印刷工場跡地 [L3] なのであった。ここもまた何年にもわたって空いたまま放置されていたのである。

弾圧への対応と引越にとさぞ忙しかったであろうこの時期にもかかれらの活躍は停滞することなく、サロモーネ時代の記録だけで大部の資料にまとめられている。その勢いは当時「欲望都市」をテーマとした先鋭的な現代美術展 LEONKART を成功させたほどだ。この頃にはむしろ、きわめて集中的な戦略の練り直しと集合的な概念の生産が行われていたというべきだろう。事実、翌95年に発行された計画書 (Centro Sociale Leoncavallo, 1995) の表紙には「レオンカヴァッロの諸活動を再組織化するために」目次の上には「組織的諸活動を再定義するために」とあり、また同時に記録資料等のドキュメントが相当意識的にアーカイヴされるようになったようである。一方ではしかし、排除と抗議行動の過程において逮捕者が出ることを避けられはしなかったが、この頃からレオンカヴァッロは非暴力路線を徹底し、そしてフード付きの白い作業着を身にまとうようになる。

トゥーテ・ピアンケ、この有名な「白いツナギ」運動の誕生である。これは排除を命令した北部同盟の市長が「これでもう都市を徘徊できるのはオバケだけだ」と宣言したのに対して、オバケになって姿を現すという詩的なレスポンスでもあった (Wu-Ming, 2001)。

こうして「旧い工場労働者の着ていた青いツナギにかわって、白いツナギがこの新しいプロレタリアートを表すシンボル」(ネグリ、ハー

ト,2005:127-131)となる。「白いコンピュータ組み立て作業着」(伊藤,1997)にも見える白いツナギは、ネグリ+ハートのいうように現代の不安定労働者の「固定した契約や保証、身分証明のベースをまったくもたない『目に見えない』労働者」たちの幽霊みたいな不可視性の象徴なのだ。このことはサバティスタ運動への、いや[との]連帯、¡Ya Basta!ネットワークの経験と思考とを通じて理論化される。

98年9月19日、1週間後に大集会を控えたその日、レオンカヴァッロを中心とした北東地域の社会センターによる共同声明「ミラノ憲章」がひとつの画期をなした\*13。その具体的な要求には、1)移民収容所の廃止および移民の解放(メツァードラ,2008)、2)否定された社会権を行使する行為を脱犯罪化すること、たとえば薬物濫用の脱刑罰化、政治犯の拘置所からの解放、AIDS患者の隔離的施設からの解放、3)保証所得(ベーシックインカム)の導入(山森,2009)、等々が掲げられた。だがここで注目したいのは、この憲章においてははっきりと「コンフリクト→弾圧→弾圧との闘い」という敗北の螺旋\*14から抜け出し、社会的コンフリクトそのものが生産の担い手であるような「コンフリクト→プロジェクト→諸権利の拡大」という旋風を呼び起こそうとする点だ。ここに鉛の時代を再来させないという強い意志が、世代を超えて共有される\*15。そのため有効な戦略としてそこで明示的に選択されたのが、白いツナギだった。

伊藤が伝えたように、90年代半ばには社会センターに対するネガティブ・キャンペーンが吹聴され弾圧の圧力が高まっていた。そこで戦術的な効果を発揮したのが非暴力不服従のための装備、白いツナギなのである。警棒で一方的に殴られたり放水や催涙スプレーにさらされてもこちらは非暴力を貫くことができるように、クッション材を身につけて作業着にくるまる。ときにはタイヤの太いチューブを盾に、そして衝突の最前線がガマンする。

こうして活躍した白いツナギ運動は、2001年のジェノヴァ・サミット抗議行動を最後に「消える」。トゥーテ・ピアンケと名指されるうちに、不可視の表象がアイデンティファイされてしまったからだ。しかしオバケたちは今世紀も、ときに別の名前で(たとえば disobbedienti)、あるいはユーロメデーのただなかに(櫻田,2006)、名もなき大衆とともに、また姿をかえて現れるだろう(櫻田,2005)。

### 3. レオンカヴァッロのひらく未来

現在に至るまでこの地(L3)で活動し続けるレオンカヴァッロはしかし、90年代の集合的な概念生産とミラノ憲章を経て、2000年を迎えるにあたり自らを社会センターというよりもむしろ「自主管理の公共空間 Spazio Pubblico Autogestito」であると自己を再定義

した。現在 Leoncavallo s.p.a.と記される所以である\*16。これ以降ミラノ市議会や国会に共産党再建党から立候補した関係者を議員に当選させたり(ジェノヴァサミットに対する大規模な抗議行動と併行してこうした動きがみられたのは驚くべきことだった)、2004年には s.p.a.から独立した財団を設立するなど大規模な組織改編を経てリニューアルを果たした(Membretti, 2007)。

自主管理公共空間レオンカヴァッロは、こうして未来へと向けた組織改編を成し遂げた2005年以来、毎年の事業報告書を発行している。ムドウのまとめたとおり官僚主義を避けて非階級的・直接民主主義的な組織形態を是とする社会センターはいわば「超法規的」な運用方針をとり形式的な定款さえ持たないものだと思われてきた。その限界をのりこえて、文字通りすべてのひとのための自主管理公共空間であるべく報告書を公表するのである。

表1 レオンカヴァッロ移動図(2005-2008年,単位€)

	2 0 0 5 年	2 0 0 6 年	2 0 0 7 年	2 0 0 8 年
運 営 収 入	430115	456650	438880	480902
寄 付	235471	138280	175065	203350
事 業 資 金			8613	0
<b>総 収 入</b>	<b>665586</b>	<b>594930</b>	<b>622558</b>	<b>684252</b>
管理運営費	211449	264151	239306	296670
維持修繕費			70000	96700
文化事業費	285211	186678	194414	180841
連帯寄付金	86768	85142	73266	70101
ホテル-学校運営費	50706	16973	17196	8090
コミュニケーション費	31452	20717	28377	24220
<b>総 支 出</b>	<b>665586</b>	<b>573661</b>	<b>622558</b>	<b>676622</b>
収 支	0	21269	0	7630

その報告書から、ここ4年間の収支内訳と推移をみよう(表1)。運営上は従来通り水平的かつオープンな合議制を決して妥協しないまま、いままこの新構造のもとで様々な事業が展開されている。自主制作の図書部門、女性と移民のための相談窓口、6つの非営利団体の事務所スペースを常設。また本拠地プレシアでは毎年2週間にわたって約10万人の動員を誇る人気の「夏フェス」Festa di Radio Onda d’Urtoを開催するラジオ衝撃波ミラノも毎日18時間放送を続けている。さらに大小複数のイベントスペースでは年間のべ300件以上のコンサートを開催、約100本の演劇を上演、約100本の映画を上映しており、現代美術展やマンガ国際見本市なども開催される。

わたしたちのみた1,000人という数は目測だったとはいえ、決してあの夜だけ例外的に大きなイベントが行われていたというわけではない。来場者数は年間約10万人、50万ユーロ近い売上があるという規模だ。もちろん、そこから経費を差し引いた利益は、収入の約3割を占める寄付とあわせて非営利文化事業に再投下されている。

こうしてみると、レオンカヴァッロは75年の設立以来、85年の再

生、94年の移転、05年の組織的再編と、約10年ごとに展開点を迎えつつ発展してきたことがわかる。そして今も撤去の圧力にさらされながら、かれらは既につぎの10年後を考え始めている。2015年、それは奇しくもミラノ万博の開催が予定されている年だ。わたしたちの訪れたときにある運営メンバーが「これからは社会センターではなく社会事業体(Social Enterprise\*17)を考えるべきなんだ」と語ったとおり、自主管理の公共空間としてのレオンカヴァッロはさらなる変貌を企てているかのようだ。EXPO 2015へと向けてミラノという都市はどこへ向かうのか? そしてコンフリクトと矛盾とを孕みつつも多様なかつ創造的な実験空間として「都市のエンジン」たらんとするレオンカヴァッロは、どのような社会モデルを提示するのか? かれらは未来構想の叩き台となるパンフレットを既に配布しており、そこにはこう書かれている。

「ミラノには、様々に異なりときには対立もする人々が出会い語り合い、芸術と文化、余暇と勉強を共有するために、いくつもの公共空間が求められている。……2015年という契機は文化を耕し涵養することを机上の空論にさせず、多様性を育む環境を増進するための、またとない、だが困難をともなう機会となるだろう。これは、新生レオンカヴァッロを構成し都市に豊かな社会的集合体を構成するプロセスの、そのはじまりに過ぎない」\*18

### おわりにかえて

おなじく「はじまりにすぎない」このドキュメントを締めくくるにあたり、本書を手にとられた方は、なぜ唐突にミラノの話なのかと疑問に思われるかもしれない。その疑問にひとことで応えるなら「釜ヶ崎にも社会センターがある」ということだ。そしてその試み＝営みは決して世界のなかで孤独な小さな事例ではなく、全世界のネットワークに繋がるひとつの結節点としてあるからだ。

もし世界の人々に釜ヶ崎のことを話す機会があれば、ここで日本語の読者にはじめからミラノのことを書いてみたように、きつかつての日雇労働組合から90年代の反失業連絡会、中之島野営闘争、そして釜ヶ崎支援機構の設立以降現在に至るまでのこの街の福祉化といった事情を説明すると同時に、文化、メディア、アートプロジェクトといったことをまるまる話すことになる。たとえばこんなふうに。

釜ヶ崎から環状線の高架下をくぐって向こう側の大阪市浪速区新世界、フェスティバルゲートという「都市型立体遊園地」があった。これは大阪市交通局霞町車庫跡地がコンペを経て信託銀行の案により再開発されたもので、1997年にオープンする。建物に巻き付くジェットコースターなどを呼び物に当初は活況を呈したが、急速に低迷しアトラクションも徐々に減り、シャッターが降りたままの空き店舗や立ち入り禁止の区域が増えていく。2001年には既に

集客施設として「失敗」したことが報道されていた。

この閑散とした遊園地、すなわち「一般市民が自由に往来できることが前提である集客商業施設」のなかに「現代芸術に関するNPO活動を複数点在させ、都市の日常にアートコミュニティを築く」どうたう芸術文化アクションプラン(大阪市,2001)が策定され「新世界アーツパーク事業」がはじまったのは2002年のことであった。ところが当初アクションプランが10年計画だったことは忘れられたかのように、2007年にはこの物件を売却する方針が示される(櫻田、吉澤、渡邊,2008)。

行政との協働に可能性を見出し、施策の意義を理解して熱心に活動をはじめた現代芸術NPOたちは、5年にして足場を失い立ち退きに応じざるをえず各々の現場を他所へ探していく。と同時に、壮大な社会実験としてたしかに築かれかけた「アートコミュニティ」の基盤は崩されてしまった。当時の新世界アーツパーク事業全体なら十分レオンカヴァッロに比肩しうものだった「のに」と、黙然するようにしてそう語ることも許されよう。

しかしNPOたちは心身奥深くひそかに痛手を負いながらも、いちど灯された希望に酸素を吹き込むべく働き続けるのである。このドキュメントこそ、まさにそのうちひとつのNPOの「その後」の記録に他ならない。レオンカヴァッロのことを日本語で伝えるために一人の日本人が収集した資料以上の重み、世界的な重みを有することは言うまでもない。弾圧に対して敗北の螺旋を辿るのではなく、諸権利の拡大へとむかう世界的プロジェクト現時点の記録として。

\*1 当調査は科学研究費補助金(基盤研究B)「非営利民間放送の持続可能な制度と社会的認知 コミュニティ放送のモデルを探る」(代表者：松浦さと子 龍谷大学経済学部)の一部として行われた。松浦さと子+川島隆編著『コミュニティメディアの未来』晃洋書房 2010年。イタリア調査については山口洋典の執筆した第7章を参照。また事前調査にあたっては大阪大学G-COE特任研究員・吉澤弥生、事後調査と追加の資料収集にあたっては都市研究プラザG-COE特別研究員・北川眞也の協力をえた。あわせてここに感謝を記す。

\*2 資料を確認したところ、それらのグループ各々が移民労働者や子どもたちのためのアソシエーション、つまり日本においては1998年に法制化されたNPO法人に相当する非営利組織なのであった。

\*3 たとえばイタリア版フルクサスともいわれるZAJ、ウンベルト・エーコやナンニ・バレストリーニらのGruppo 63、それにギー・ドゥポールも72年～77年イタリアにいた。

\*4 文化実践の豊かさについてはガタリ(1988)、粉川(1982)

を参照。

\*5 社会センターという言葉じたいは、自治体設置の集会所（コミュニティ・センター）の意味で50年代にも用いられたが、本稿でいう社会センターは草の根の自主管理に基づくものであり明確に区別される。

\*6 「昨秋、数年ぶりに盛り上がった高校生を中心とする数十万人の〈男の子、女の子 Ragazzi e Ragazze〉運動」、85年の若者たち、あるいは85年の高校生たちともいわれる。

\*7 75年に獲得されたスカラ・モビーレ（賃金の物価スライド制）の改訂（スライド率削減）に反対する共産党が廃止を呼びかけたが大敗した。

\*8 Mudu自身の注釈によると、厳密な同定は不可能であるものの、移転を余儀なくされる場合もある（それに応じて名称を変更する場合もわからない場合ある）から実質的に10%程度多く集計されたものと思われるが、一方で記録の残されていない社会センターの事例を網羅できようはずもないので、とりわけ80年代後半については実数よりも相当少なく数えられたと考えられる。

\*9 資料をもとに作成（Google Maps+Adobe Illustrator）。なお、本文中にふれることができなかった[C]は労働者階級の作家プリモ・モローニ資料室で有名な、1976年以来の歴史ある社会センターCox18（コンケッタ）の位置である。調査期間中に当局によって封鎖されたが、短期で取り戻された。他にもミラノには現在も社会センターが多数あり、長らく閉鎖されていたところが昨年とりもどされた例もある。

\*10 社会センターや自由ラジオ局の名称には、しばしばその拠点のおかれた通りの名前が用いられる。

\*11 少年たちの名はファウストとイアイオ（Fausto e Iaio）、2人の殺害にはネオ・ファシストの犯罪的組織が関与したといわれる。30年を経て記憶を風化させないための本（AA.VV., 2008）も出版された。

\*12 子どもたちを殺害したのがネオ・ファシストに違いないというだけでなく、ファシズムの恐怖あるいはパルチザンの闘争を直接に経験した者、労働運動を経験してきた者も多数いた母親世代が反ファシストであるのは半ば当然のことだ。

\*13 <http://isole.ecn.org/leoncavallo/>

\*14 弾圧に焦点化する過ちの認識は77年〈運動〉に対するビフォ痛恨の反省と共通する（ベラルディ,2009）。

\*15 あえていえばミラノ憲章から3年後のジェノヴァではまた一人が死亡、弾圧の政治は緊張を高めるのであるから（櫻田,2010）、非暴力のみちは長くそして険しい。

\*16 SpA（エッセピア）とは当然、イタリア語で株式会社を意味する Società per azioni の略号を洒落ている。

\*17 もちろん社会的起業家の事業を社会的企業（Social Enterprise）という言葉の用法なら様々な事例を通じて日本語でもなじみのある言葉となっている、しかしレオンカヴァッロがいうときの Social Enterpriseには Socialの方に強いアクセントがおかれて「もうひとつの社会」がこだましている。

\*18 <http://www.leoncavallo.org/spip/docs/masterplan2015.pdf>

#### 《参考文献》

Naomi Klein, Naomi (2001) "Something Maybe Beautiful", (<http://www.naomiklein.org/articles/2001/06/something-maybe-beautiful>)

Centro Sociale Leoncavallo (1995) Prospetto Informativo. 麻生令彦 (1983) 「クロニクル 七〇年代イタリア革命的左翼——アウトノミアを中心に」『インパクション』、25, pp.14-26。

麻生令彦 (1986) 「『クモの戦略』へ向けて アウトノミア——その限界と可能性」『現代思想』、14(7), pp.232-237, 青土社。

Wright, Steve (2002) Storming Heaven, Pluto Press. ベラルディ, フランコ (ビフォ) (2009) 『プレカリアートの詩——記号資本主義の精神病理学』櫻田和也訳、河出書房新社。

伊藤公雄 (1993) 『光の帝国／迷宮の革命——鏡のなかのイタリア』青弓社。

伊藤公雄 (1997) 「空間の政治学に向けて——シチュアシオニスト、アウトノミアからレオンカヴァッロへ」、木下誠監訳『アンテルナシオナル・シチュアシオニスト 3』、pp.329-337、インパクト出版会。

ガタリ, フェリックス (1988) 『分子革命』杉村昌昭訳、法政大学出版局。

粉川哲夫 (1982) 『メディアの牢獄』晶文社。

AA.VV. (1994) Comunità virtuali. I centri sociali in Italia, Manifestolibri, Roma.

Ibba, Alberto (1995) Leoncavallo 1975-1995: vent'anni di storia autogestita, Costa&Nolan, 1995. Consorzio AASTER, CS Cox 18, CS Leoncavallo, Moroni, P (1996) Centri Sociali: Geografie del desiderio, Shake, Milano.

Mudu, Pierpaolo (2004) Resisting and challenging neoliberalism: the development of Italian social centres, Antipode, 36, 917-941.

ネグリ, アントニオ、ハート, マイケル (2003) 『〈帝国〉』水嶋一憲ほか訳、以文社。

ネグリ, アントニオ、ハート, マイケル (2005) 『マルチチュード 下巻』幾島幸子訳、日本放送出版協会。

ヴィルノ, パオロ (1997) 「君は反革命をおぼえているか?」酒井隆史訳、『現代思想』25(5), pp.253-269, 青土社。

櫻田和也 (2010) 「自律的メディア生産のメソッドロジー」『アナキズム』、13, pp.73-104。

Wu-Ming (2001) "Tute Bianche: the practical side of myth making (in catastrophic times)." (<http://www.wumingfoundation.com/english/giap/giapdigest11.html>)

メッツァードラ, サンドロ (2008) 「社会運動として移民をイメージせよ?——移民の自律性を思考するための理論ノート」北川真也訳、『空間・社会・地理思想』、12、大阪市立大学、pp.73-85。

山森亮 (2009) 『ベーシックインカム入門』光文社。

櫻田和也 (2006) 「プレカリアート共謀ノート」『インパクション』、151, pp.20-35。

櫻田和也 (2005) 「バルセロナのアート・アクティヴィズム」『SAPB』、11、新世界アーツパーク。

Membretti, Andrea (2007) "Centro Sociale Leoncavallo: Building citizenship as an innovative service", European Urban and Regional Studies, 14(3), pp.252-263.

大阪市 (2001) 『芸術文化アクションプラン——新しい芸術文化の創造と多彩な文化事業の推進に関する指針』。

櫻田和也、吉澤弥生、渡邊太 (2008) 「大阪市『新世界アーツパーク事業』にみる文化政策の課題——文化と公共性の現場」『文化政策研究』、vol.1, pp.46-59、日本文化政策学会。

AA.VV. (2008) Fausto e Iaio: trent'anni dopo, Costa & Nolan.

#### 櫻田和也 (さくらだかずや)

大阪市立大学都市研究プラザ特任講師（情報基盤整備）。1978年生。2003年よりNPO法人 記録と表現とメディアのための組織 [remo] にてオルタナティブメディアに関する調査研究および展覧会等の企画・制作。